

---

# 公園23時12分

朱印

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

公園23時12分

### 【Nコード】

N5542M

### 【作者名】

朱印

### 【あらすじ】

夕方に降った雨はどこかへゆき、所々にのこる雲の切れ端だけが浮かぶきれいな夜空。月がきれいで、湿った土から立ち上る雨くさががしんみりとした夜の公園を包んでいた。

彼女に電話しようと思ったブランコから降りようとする、ちょうど彼女から電話がかかってきた。

話した内容は他愛もない話。

昔と同じようなふたり。

ああ、なんだか人間って変わらないものなんだな、と実感すると共に変わってしまったものにも気づいた公園 23時12分。

「また会おうね」

彼女はそう言って泣いていた。

なみだで彼女のきれいな顔が濡れていた。

彼女はお気に入りのコートを着て、いつもの軽口や毒舌を言うこともなくただ泣いていた。

目の前がぼやけていてあまり見えなかったけど俺たちは見つめ合っていた。

俺は目をぬぐい彼女を見、彼女とキスをした。

俺たちは似たもの同士でいつも一緒にいた。

好きな映画、好きな歌手、好きな本、それを知る時期、買う時期がほとんど一致していた。

小、中と一緒に家も近所だったためなんとなく世間で言うところの付き合ってるみたいになっていた。

中学もあと少しで卒業し、彼女と一緒に高校を志望していた時期に親から引越しを告げられた。

突然の出来事だった。

当時中学生の俺にはどうすることもできずに彼女とは別れた。

男というものは初恋の人に似ている人間のことを好きになると言う話を聞いたことがあった。

俺も例外でなく彼女に似た人と付き合った。

性格が似ている人、見た目が似ている人、雰囲気似ている人。いろいろな人と付き合った。

もうかなり美化されて居るであろう彼女のことを思い出した。会いたかった

普段は行かないような自宅とは街の中心を挟んで反対方向の静かな住宅街にいた。

友人に聞いて彼女の現在の住所を教えてもらった。

女々しいことに、踏ん切りが付かず近くの公園でブランコに揺られていた。

思い切って彼女を訪ねることにし、ブランコから降りた。

電話が鳴った。

「もしもし？どちら様ですか？」

「わたしー。久しぶりー元気？」

久しぶりの彼女の声だった。

「そこそこ。元気にやってるよ」

「ふふーん。じゃあ彼女の一人くらいいるんだ？」

「当たり前だよ。」

「嘘でしょ。君嘘をつくときいつも声がちょっと変わるからすぐ分かるよ」

「いつもって…何年前の話だよ。まあ嘘だけどさ」

「なんだホントに嘘だったんだ」

「半信半疑かよ！ってというか彼女がいれば元氣って俺が女好きみたいじゃないか」

「いやー。別れ際にキスするような奴は女好きって決まってるじゃない」

「覚えてやがったか。」

「ふふ」

楽しそうな彼女の声が響いていた。

「まあ、君のようなさえない人物と付き合えるのはわたしくらいだと思ってたからねー」

「一応お前と別れてから何人かと付き合ったぞ」

「ホントに？」

「今度はホント」

「ふーん。そっか」

会話が止まる。

彼女は何かを切り出そうとして悩んでいるような気がした。

「ねえ」

「ん？どうした。悩み事なら聞くぞ」

「わたしたちさあ、やり直さない？」

女というものは結婚前になると精神的に不安になるらしいと言う話を聞いたことがあった。

「ゴメン。無理」

「…ん。だよ。そうだよ。ゴメン変なこと言っちゃって」

「まあいいよ。大変なんだろう」

彼女の声は少し震えていて泣きそうになっていた。

支えてあげなければいけなかっただろうか。あのときのように優しくキスをすれば良かっただろうか。

いや、俺の役目ではないだろう。彼女の旦那がその役目なのだ。

「ゴメンね……結婚式来週の土曜日なんだ。来ない？」

「今更どの面下げて行ったら良いんだよ」

彼女の晴れ姿を見たい気もしたが笑って断った。

「だよー。花嫁を結婚式の一週間前に振った男ですー。なんて言えないよねー」

「だな」

しばらく二人で笑っていた。

「うん！ゴメンね。こんな電話しちゃって」

「別に良いよ」

「じゃあまた」

「またってまた電話してくるのか？」

「さあ？」

「さあってお前：まあいいや。頑張れよ」

「うん」

後日俺の家に子供が生まれたとの絵はがきが送られた。

笑っている彼女の隣には俺とは似つかない男が立っていて彼女の腕の中には幸せそうな子供がいた。

その子供の名前は「潤」旦那が付けたそうだ。

「ほらこいつ俺の初恋の相手」

「きれいな人だねー」

「で、この子供の名前なんだと思う？」

「分からないよー。ヒント」

「俺らの子供の名前と一緒に」

「ホント？潤？」

俺の子供の名前は「潤」

俺が付けた名前だ。

今度お返しとばかりに俺らの幸せそうな写真を送りつけてやると思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5542m/>

---

公園23時12分

2011年4月13日22時10分発行